

農林水産大臣賞受賞

～笑顔と情熱 新しい風吹く里～
されだに

じゅうみんじちされだに
受賞者 **住民自治されだに**
(愛媛県伊予市)

みやもと きよたか
代表者 **宮本 清隆**

■ 地域の沿革と概要

伊予市は愛媛県のほぼ中央にあり、県都松山市から約 10 km 南に位置している。平成 17 年 4 月 1 日に伊予市、中山町、双海町が合併して誕生し、総面積 194.47 km²、人口約 3 万 8 千人である。

東南には四国山地、西北に瀬戸内海を望み、北部は道後平野の南端に位置する平坦部、西北部は瀬戸内沿岸、南部は標高 500～600m の中山間地からなる。瀬戸内海に面する伊予市の気候は温暖で、平均気温が 16.5℃と過ごしやすく、降水量は年間 1,315 mm である。

市内総生産額は、平成 27 年度は約 1,190 億円で、愛媛県の 2.4% にあたる。農林水産業では県内の 5.6% を占める。

農家戸数 1,591 戸、経営総耕地面積 1,644ha、うち水田 676ha、畑 221ha、樹園地 747ha である。特に平坦地では土地利用型農業や施設トマト、イチゴなどの園芸作物を、沿岸地域を中心に施設柑橘が、中山間地域を中心にキウイフルーツや栗が主要な品目として位置づけられている。近年、都市近郊部の立地条件を生かして J A 直売所、道の駅等への出荷を目的とした、少量多品目栽培に取り組む経営体も増えている。

第 1 図 位置図



第 1 表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	15集落
地区の性格	地縁的な集団
農家率 (内訳)	44.1% 総世帯数 238戸 総農家数 105戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 51戸 1種兼業農家 5戸 2種兼業農家 43戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 2,184ha 耕地面積 79ha 田 19ha 畑 16ha 樹園地 43ha 耕地率 3.6% 農家一戸当たり耕地面積 0.8ha

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

佐礼谷地域は伊予市の南西部に位置し、市の中心部から車で 20 分の位置にある旧中山町の 1 つの地域である。明治 22 年の町村制施行により佐礼谷村が成立し、昭和 30 年の昭和の大合併により中山町と合併した

周囲を標高 600～800m の山並みに囲まれた中山間地域である。地区の総面積は 2,183ha、耕地面積は約 79ha(水田 19.39ha、畑 16.25ha、樹園地 43.41ha)、耕地率は 3.6%と低いが、きれいな山水、豊かな土壌温暖な気候に恵まれ、米、トマト、キュウリ、栗、キウイフルーツなどが栽培されている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

平成 17 年の伊予市、中山町、双海町の市町村合併に伴い、佐礼谷地域を含む周辺部の生活利便性や活力の低下、行政サービスの低下が懸念された。そこで、平成 19 年、伊予市では第 1 次伊予市総合計画を策定し、「ひと・まち・自然が会う郷(くに)」を目指し、「参画と協業の郷づくり」を掲げ、住民が主役となる自治を推進してきた。

市では、「モデル地区」を設定し、重点的な支援を行うことで、住民自治推進のけん引役とし、市内全域への波及・推進を目指した。この最初のモデル地区として、自治基盤がしっかりしていた佐礼谷地域が選定された。佐礼谷地域では、人口が 45 年前に比べて約 30%まで減少し、年齢構成も 60 歳以上が 62%を占めるなど、厳しい現実を目の当たりにして、真剣に地域の将来を考える機運が高まっていたことや、合併による行政サービスの低下といった危機感があったことから、住民自治組織を立ち上げることを決断した。

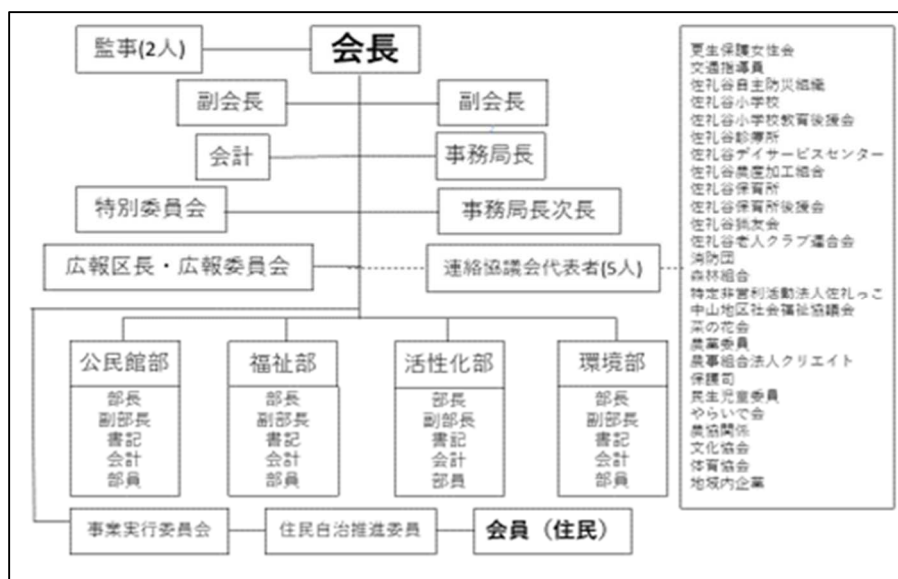
そして、従前より地域の課題解決に取り組む「佐礼谷地域自治振興会」と「佐礼谷公民館」が母体となって検討委員会を設置した。住民を対象とした過疎少子高齢化や住民自治の推進に関する学習会の開催、住民や各種団体企業への説明会を進め、平成 20 年 6 月、佐礼谷に関わるすべての人、団体、農事組合法人などの地元組織が一体となった住民自治組織「住民自治されだに」が発足した。

(2) むらづくりの推進体制

住民自治されだには、会長 1 名、副会長 2 名、事務局長 1 名、地域内 26 団体の連絡協議会代表 5 名、4 つの部会(「公民館部」「福祉部」「地域活性化部」「環境部」)から組織されている

年 1 回開催される総会が、最高意思決定機関となっており、事業計画・報告、事業予算などの重要事項を審議・決定する。各部会の事業計画・事業予算もここで承認された後、1 年間の事業を行うこととなる

第2図 組織図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

- ① 設立当時のワークショップに基づくビジョン作りから始まり、子供たちも含めた住民一人一人が地域の一員であるとの意識を持たせたことが成功のポイントと考える。地域の課題や目標を明らかにすることで、「自分にどんなことができるか」「これから何をしたいのか」「これだったら自分にもできる」など、地区の一員である意識の醸成に併せて、地域の中の自分の役割、居場所を感じることで地域への愛着、地域の発展に繋がっている。
また、「地域の人」だけでなく、人の集合体「小学校」「老人会」「診療所」等々を包括的に自治体運営に巻き込んだ運営が人、組織の結束に寄与している。
- ② 食を切り口とした“イエローキッチン”の役割は非常に重要である。地区の食材を使った郷土食の伝承、各種イベントでの食の提供など、食を通じた活動が地区住民の憩い、地区の良さの意識付けや愛着に繋がっている。また、加工品開発と販売を行うことで収入の増加が期待でき、収入面での安定化により次世代の活躍に繋がる土台づくりとして非常に意義ある活動である。
- ③ 一年を通した各種イベントの開催や、その企画運営、準備等による心的、労的負担は計り知れないが、活動そのものが地域住民の生きがい・やりがいとなり、地区の活性化を推し進めている。
- ④ 地区の活力の源は人。特に、子供の存在は欠かせない。中山間地域では珍しく、佐礼谷地区には子供たちの居場所である小学校が人数は少ないながらも存在する。また、地域の若者で組織する「SVG」や「SVC」の

地元根ざした活動や将来を担う子供たちの育成や受け皿となっていることは高く評価できる点である。

次に、住民の健康を見守る診療所や農協のエコープ、郵便局や農協、ガソリンスタンドなどの施設が残っていることも見逃せない点である。

- ⑤ 地域では、「移住定住促進事業」に取り組み、空き家の状況把握や調査を行っている。また、訪れた移住希望者に空き家や地域の活動を紹介しており、この活動には、休日関係なく教員も参加し、佐礼谷小学校の魅力を伝えている。地域では、子供の増加が地区の発展に欠かせないものと認識し、地区が一体となって歩んでいることは、非常に意義深いことである。

また、ゆずこしょうの製造に人手が必要となり、地区外からの応援を呼び掛けたところ、松山市内の消費者から「ゆずこしょう作りを応援したい」との声があり、この機会を通じ、「ゆずこしょうで婚活イベント！」など、次々と新たな計画が企画されている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 水田農業の維持と「ホタル米」のブランド化

平成元年に設立された「農事組合法人クリエイト利用組合」（構成員11人）が地域の水田農業の維持に大きくかかわっている。設立に合わせて、新農業構造改善事業を活用し、「中山町穀類等乾燥調製施設」を整備し、集落の稲刈り等の作業受託を行ってきた。

現在では、稲刈り作業を地区内水稻面積の約80%を、乾燥調製についてはほぼ100%を請け負っており、耕作放棄地の解消、農地の保全や農家の生産コスト低減に大きく貢献している。また、地域外からの依頼が年々増えており、周辺地域へも広がっている。また、平成27年から、豊かな清流で育まれた「ホタルの里」で生産した米を「ホタル米」と命名し、地元道の駅を通じて地域内外の消費者に販売している。人気も高くすぐに売り切れるため、今後の増産を検討中である。

(2) 適地適作による園芸農業

旧中山町一帯は、結晶片岩を母材とした腐食に富んだ肥沃な褐色性森林土壌と黄褐色性森林土壌に広く覆われており、作物の栽培には非常に条件の良い地域である。また、中山間地の特徴である昼夜の寒暖差により、米、落葉果樹（栗、キウイフルーツ）、トマトの栽培が盛んに行われ、農家の収入源となっている。

特に、栗は400年前から栽培されており、江戸時代三代将軍徳川家光にも



写真1 栗園地

献上された史実が残っている。佐礼谷地域を含む旧中山町で栽培された栗は、「中山栗」として、県の「愛」あるブランド産品にも認定されており、県外市場で高い評価を得るなど 主要な品目として位置づけられている。

(3) されだにベジタブルガーデン (SVG) の創設

地域の若者が耕作放棄地を活用して、遊休農地保全管理モデル農場「されだにベジタブルガーデン」を設置し、地域の優れた農業を次の世代に伝えるため小学生とさつまいもの栽培を始めた。

モデル農場では農家の指導を受けながら、栽培技術や農機具の使い方を習っており、地元の若者や子供たちが土と触れ合うことで農業の素晴らしさを知るとともに、故郷への愛着を鑑みるきっかけとなっている。



写真2 耕作放棄地対策

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 地域に吹く新しい風 -女性が飛躍・イエローキッチン

前身の「佐礼谷特産品開発女子部」を母体に、平成26年住民自治されだに特産品開発部「イエローキッチン」が地元女性6名によって結成された。

特産品開発にかかわるだけでなく、佐礼谷ふるさと便事業、各種イベントなどでも佐礼谷地域の食に関する役割を一手に引き受ける重要な組織である。イエローキッチンでは、黄色い丘での菜の花祭り期間中にゴリラハウスでワンコインランチを提供している。期間終了後は、地域の中心部にある「旧金岡邸」に場所を移し、月1回“元祖乙女ランチ”として称して、郷土料理等の提供に腕を振るっている。



写真3 イエローキッチンのメンバー

(2) 佐礼谷産柚子を使った特産品開発

「されだに ゆずこしょう」は、佐礼谷産の柚子を使った逸品である。会員が所有する畑に、約100本の柚子の苗木を植栽し、栽培をしている。実の成熟を見極めてから収穫し、「機械ですりおろすと自然な香りが消えてしまう」との意見から、皮のすりおろしは全て手作業で行っている。そのため、加工シーズンが始まると地域住民、伊予農業高校、ボランティア

の手を借り、時間をかけて手ですりおろしている。平成 30 年度には「ますます、いよし。ブランド」製品にも認定され、道の駅なかやま等で販売されている。昨年度は 9 月に 1,500 本（45 g 入り）を製造し、1 か月で売り切れるほどの人気となり、今年度は 2,000 本に増産する予定である

（3）佐礼谷ふるさと便

佐礼谷では毎年 12 月のお歳暮時期に、ふるさと便を限定 100 個発送している。イエローキッチンが手掛けた、ゆずこしょうをはじめ、ゆずマーマレード、手作りこんにやく、しいたけなど佐礼谷の特産品と、布で作った干支の置物を詰め込み全国に届けている。

（4）NPO法人佐礼っこ

犬寄トンネル上部にある標高 300m 「犬寄峠の黄色い丘」は、平成 27 年、地域の住民で組織する「NPO法人佐礼っこ」が中心となって、廃園となった果樹園地を整備し、伊予市の花である菜の花等を植え、新しい観光名所となった。3 月は、丘いっぱいに広がる菜の花の花見が楽しめ、10 月には渡り蝶々「アサギマダラ」が数百匹飛来し、蝶とのふれあいや撮影が楽しめる。

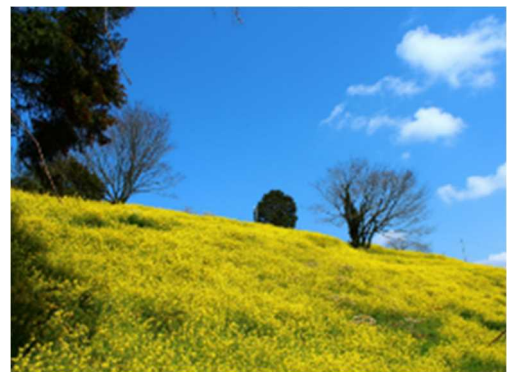


写真 4 黄色い丘

黄色い丘は、都市住民と田舎を結ぶ交流拠点として、流星群観察、野外ライブ、田舎塾、撮影コンテストなどを開催している。この丘は、みかん山の耕作放棄地だったが、手作りで駐車場、休憩所、広場、簡易ステージを整備しており、耕作放棄地を活用した地域再生の優良な事例となっている。また、観光やイベント体験してもらっただけでなく「食」を加えた新たな観光スタイルを打ち出した。

（5）佐礼谷バレーボールクラブ(SVC)

「バレーだけでなく何か皆で集まる機会を」という思いの中で、平成 21 年、佐礼谷バレーボールクラブが発足した。

メンバーは 30 歳代と若い世代で構成されており、自らがバレーを行う「体育部」、住民自治の地域活性化部に所属して各種イベント活動に協力する「イベント部」、子供たちへのバレーボールの指導を行う「教育部」がある。SVCの規約には「本部会は、バレーボール活動通じ部会員相互の連携、健康増進、地域内外の交流を図り、将来に向けて『住んで楽しく、自慢のまちづくり』を目的とする」とあり、地域活性を目指した組織であると明言している。また、子供たちへのバレーボールの指導にとどまらず、子供たちが将来地域に残るための受け皿となること、次世代につな

ぐことを目指している。

(6) 佐礼谷地域農地・水・環境保全会

「佐礼谷地域農地・水・環境保全会」と環境部、されだにベジタブルガーデン、地元大学生が連携し、遊休農地の保全管理や資源循環活動を行っている。

佐礼谷地域では、草木が生い茂っている所を「オドロ」といい、その程度がひどいものを「オドロガンス」という。「オドロガンスをきれいにしようやあ」から始まった保全管理は、地域の子供たち、青年、壮年、老人、農家、非農家、大学生、地域外住民とあらゆる階層を巻き込んだ環境保全対策を行い、環境保全に関する意識の高揚に繋がっている。

(7) 移住・定住促進活動

平成 28 年、「移住定住プロジェクト」を開始し、「佐礼谷へきてみんさいモニターツアー」を開催するなど、積極的に活動を始めた。

平成 29 年には伊予市に「愛媛県伊予市移住サポートセンター“いよりん”」が開設され、当施設と連携しながら移住者受け入れに向けた勉強会の開催、古民家再生活用基金の創設などに取組んできた。

平成 30 年 5 月 25 日、“懐かしき里山暮らしを満喫”というメッセージを掲げ、初の「空き家バンク」登録を行った。

平成 30 年には、古民家を改修して 1 人が定住を始めた。また、今年 10 月には埼玉県から 1 家族（30 歳代夫婦＋子供）の移住が決まっている。その他にも、50 歳代男性が移住に向けた相談に来るなど、活動の成果が出始めている。